

平成 22 年 4 月 30 日現在

研究種目：基盤研究（C）
 研究期間：2007～2009
 課題番号：19530800
 研究課題名（和文）生活科及び総合的な学習における教師の実践的力量形成のための研修プログラムの開発
 研究課題名（英文）The Development of Training Program for a Teacher's Practical Competence in Living Environment Studies and Integrated Study
 研究代表者
 中野 真志（NAKANO SHINJI）
 愛知教育大学・教育学部・教授
 研究者番号：90314062

研究成果の概要（和文）：今日、生活科と総合的な学習という名称はある程度認知されたとはいえ、他の教科や時間よりも設置されて日が浅く、小学校の教師でさえその趣旨を正しく理解していない者もいる。また指導や支援が難しい。さらに教師間格差や学校間格差が目立つという現状がある。それゆえ、他の教科や時間以上に、教師の実践的力量形成は切実な問題である。本研究においては、各学校の校内研修等で利用可能な生活科及び総合的な学習のモデル的研修プログラムの開発を行った。

研究成果の概要（英文）：Though the names of Living Environment Studies and Integrated Study are recognized fairly today, they haven't been longer since their establishments than the other subjects and periods. Some elementary teachers don't understand their intention properly. It is also difficult to teach them. The differentials are large between teachers and between schools. Because these actual state, it is an urgent problem to increase a teacher's practical competence in Living Environment Studies and Integrated Study. In this study we developed the model training programs of Living Environment Studies and Integrated Study, which are utilizable in the teachers' training within each school and so on.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2007年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2009年度	700,000	210,000	910,000
年度			
年度			
総計	2,700,000	810,000	3,510,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育学

キーワード：教育学、生活科、総合的な学習の時間、教師の実践的力量形成、研修プログラム

1. 研究開始当初の背景

生活科は全面実施されて14年が経ち、その理論と実践は概ね定着したといえる。しかし、伝統的な教科に比べ設置されて日が浅く、小学校教師でさえその趣旨を正しく理解し

ていない者もいる。また、この教科の本質と独自性ゆえに指導や支援が難しいという側面をもつ。さらに単に活動するだけにとどまっていたり、画一的な教育活動に陥ったりしているという傾向もしばしば見受けられる。

さらに、生活科の授業担当者に偏りがある。教師間格差、学校間格差も目立つ。県市等の教育センター、教育研究所では人員削減により、生活科専門の担当者が存在しない傾向があり、生活科の研修が停滞しがちである。

「総合的な学習の時間」は全面実施される前から学力低下の問題が指摘され批判されたという経緯があるが、現状ではある程度定着し、子どもたちの自ら調べ・まとめ・発表する力、思考力・判断力・表現力、学び方や学習意欲が向上するなど肯定的な声が聞かれるようになった。しかし、「目標」や「内容」が明確でなく検証・評価が不十分な事例、教科等の学習内容との関連に十分配慮がなされていない事例、教員の必要かつ適切な指導を欠き、教育効果が十分上がっていない取り組みがあるなど課題も多い。さらに、生活科以上に教師間格差、学校間格差が目立つように思われる。

このような生活科及び「総合的な学習の時間」の現状をふまえると、他教科等以上に教師の実践的力量的形成は切実な問題であると言える。

2. 研究の目的

今日、学校教育に対する社会的な要請及び子どものニーズが多様化・複雑化する中で、優れた実践的力量的を備えた教員の養成、現職教員の研修が不可欠である。そこで、本研究においては、生活科及び総合的な学習を中心に、教師の実践的力量的を促進する効果的な研修プログラムの開発を行う。それは、従来の講義中心型の教育プログラムではなく、コンピューター及び視聴覚教材の活用、授業研究とその協議、ワークショップによる体験活動などを積極的に採り入れたプログラムである。なお、それらを大学や大学院の授業、協力校の校内研修等において試験的に実施し改善しながら、一般的に利用可能なモデル的研修プログラムの開発を目指す。

3. 研究の方法

研修プログラムのためのデータの収集

各県、市町村における教育委員会、教育センター、各大学や附属学校で実施されている生活科のための教員研修に関する資料を収集しながら、その問題点を把握し、研究全体の方向について協議する。

研修プログラムの内容・方法の検討

生活科と総合的な学習における実践的力量的の形成のための研修プログラムに必要な内容及び方法を協議し、検討する。

試験的な研修プログラムの開発

愛知県における「10年経験者研修（生活科）」、「総合的な学習コーディネーター養成講座」等の研修内容をベースにしながら、コンピューターと視聴覚教材の活用、授業研究とその協議、ワークショップによる体験活動などを積極的に採り入れたプログラムを開発する。

研修プログラムの実施

開発した研修プログラムを各地の研究会や研修会、校内研修、部分的に愛知教育大学の学部授業、大学院の授業において実施する。

研修プログラムの改善

研修プログラムの実施者や参加者の意見や、研究会で実施する参加型ワークショップでのグループ討議の結果を踏まえ、研修プログラムの改善の方向について検討する。

図1【研究の計画と方法】

4. 研究成果

本研究において一般に利用可能な生活科及び総合的な学習のモデル的研修プログラムの開発を行った。開発した生活科及び総合的な学習における研修プログラムの概要は以下に示すとおりである。

(1)生活科の研修プログラム

「生活科の本質、教科の独自性」

- ・生活科新設の経緯や背景、学習指導要領の改訂の要点
- ・生活科と「総合的な学習の時間」の関連
- ・生活科で期待される教師像
- ・生活科の年間指導計画作成の要点
- ・生活科のカリキュラムを作成する際に必要な視点
- ・生活科の学習指導の特質
- ・充実した年間指導計画の作成
- ・生活科の単元構成の基本的な考え方
- ・生活科の単元の特徴
- ・生活科の単元構成の流れ
- ・単元の種別による構成の考え方
- ・授業・授業計画の考え方
- ・低学年児童の発達特性の理解や子どもたちを見取る目
- ・子どもへの指示・助言・発問の工夫
- ・子どもの思いを最大限に引き出す学びへのアプローチ
- ・生活科における評価のあり方
- ・生活科独自の評価の考え方
- ・生活科の学習を評価する三つの視点

- ・評価における留意点
気付きの質を高める
- ・生活科における「気付き」
- ・知的な気付きを高める
- ・気付きの質を高める学習指導の進め方

(2)総合的な学習の研修プログラム

- 「教科とは何か、総合的な学習とは何か」
- ・総合的な学習の創設の趣旨と経緯
 - ・学習指導要領における総合的な学習の改訂の趣旨
 - ・総合的な学習の有効性（「子どもたちの動機付けにとって有効であり、学ぶことの意味を実感できる」、「教科だけではなく学級の壁、学校の壁、教師間の壁を越える」、「家庭や地域と連携することによって、家庭の教育力、地域の教育力の回復へつながる」）
 - 総合的な学習の危険性、問題点
 - ・断片的で無計画になりやすい
 - ・活動主義、体験主義に陥る
 - ・社会化の過程を軽視する
 - ・従来の学力観、評価観では成功しない
 - ・文部科学省と地方レベルのズレ、歪み
学校の特色あるカリキュラムづくり
 - ・総合的な学習のカリキュラム・デザイン
 - ・地域とのかかわり、地域とともに教え合い
学び合う
 - ・総合的な学習の評価
 - ・総合的な学習の11の観点
「新学習指導要領」における総合的な学習
 - ・探究的な学習（「課題の設定」、「情報の収集」、「情報の整理・分析」、「まとめ・表現」）
 - ・協同的な態度の育成（「多様な情報を活用して協同的に学ぶ」、「異なる視点から考え協同的に学ぶ」、「力を合わせたり交流したりして協同的に学ぶ」）

では、上述のような研修内容を活用し、どのような研修プログラムが可能なのか。例えば、「気付きの質を高める教師の支援と指導」では以下のような研修プログラムが考えられる。

研修テーマ：気付きを高める教師の支援・指導

- ・研修時間 3時間
- ・研修場所 小学校 教室
小学校校区
- ・研修内容

研修プログラム「気付きの質を高める」(15分)

研修プログラム「気付きの質を高める」より、一部を抜粋して説明する。「気付き」についての基本的な理解を促進することを目的とする。

ワークショップ(45分)

実際の授業の一場面をビデオ等で視聴し、子どもたちがどんなことに気付いたか、そして、その気付きをどのようにしたら広げたり深めたりすることができるか、小グループでディスカッションする。

フィールドワーク「校区探検」(60分)

フィールドワークの方法について説明をしてから出かける。「人」「社会」「自然」に対して、目や耳だけでなく、鼻や舌や手をフルに使ってかかわる。また、デジタルカメラを使って撮影も行う。

フィールドワークの振り返り(45分)

フィールドワークで気付いたことをまとめたり、発表したりしながら振り返る。参加者同士でそれぞれの気付きを共有する。

研修プログラム「気付きの質を高める」(15分)

研修プログラム「気付きの質を高める」より、一部を抜粋して説明する。気付きの質を高めるために必要な教師の支援について説明する。

図2【研修プログラムの活用事例】

今回開発した研修プログラムの内容は、現職教員の研究会や研修会、大学の授業等において有効であり、活用しやすいという結果が得られた。

このプログラムは理論と実践の統一を目指し、具体的な授業場面、子どもの具体的な姿、制作物、記録等の映像(写真等)を組み入れたのであるが、今回の研修プログラムの検証では時間的な制約があり、体験的な活動、ディスカッション等を組み入れることができなかった。

我々は、図2のようにワークショップ、フィールドワーク、振り返り等を含めた研修プログラムが有効であると考えている。その場合には、研修内容を抜き出して活用することも効果的であろう。

今後、この研修プログラムをさらに改善し、「理論と実践についての理解を深める研修プログラム」、「カリキュラム・デザインや単元構想、教材開発に関わる研修プログラム」、「授業研究・子ども理解に関わる研修プログラム」等の開発を行っていきたいと考えている。

5. 主な発表論文等
(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計11件)

太町智、中野真志「生活科の授業を改善す

る教師の研修プログラム」、愛知教育大学教育実践総合センター紀要、査読無、第13号、2010年、1-7

<http://repository.aichi-edu.ac.jp/dspace/handle/10424/2775>

中野真志「デューイ実験学校におけるオキュペーション - 典型的活動、社会的オキュペーションとの関連を踏まえて - 」愛知教育大学研究報告(教育科学編) 査読無、第59輯、2010、11-19

<http://repository.aichi-edu.ac.jp/dspace/handle/10424/2929>

中野真志「シカゴの公立諸学校とデューイ実験学校における授業」、生活科・総合的学習研究、査読無、第7号、2009、15-22

中野真志、小松沙矢香「『総合的な学習の時間』における価値ある体験学習のあり方 - 東京都武蔵野市教育委員会『セカンドスクール』の実践を通して - 」愛知教育大学教育実践総合センター紀要、査読無、第12号、2009、69-76

<http://ci.nii.ac.jp/naid/120001339280>

久野弘幸、三浦浩子「教師の実践的感性を育む研修の在り方に関する研究 - 教師の指導力育成を図る試みから 研修の事例を通して - 」愛知教育大学教育実践総合センター紀要、査読無、第11号、2008年、17-26

<http://repository.aichi-edu.ac.jp/dspace/handle/10424/95>

菅沼敬介、野田敦敬「生活科における自然体験活動を基盤とした『人とかがわる力』の育成に関する研究」、愛知教育大学研究報告(教育科学編) 査読無、第57輯、2008、1-8

<http://repository.aichi-edu.ac.jp/dspace/handle/10424/291>

中野真志「デューイ実験学校における管理と監督」、愛知教育大学研究報告(教育科学編) 査読無、第57輯、2008、9-16

<http://repository.aichi-edu.ac.jp/dspace/handle/10424/263>

中野真志「ジョン・デューイとアメリカ・ヘルバルト主義 - プリガム・ヤング・アカデミーの第二講義と第八講義を中心に - 」日本デューイ学会紀要、査読有、第48号、2007、131-140

[学会発表](計4件)

中野真志「デューイ実験学校における協同的なカリキュラム開発 - エラ・フラッグ・ヤング(Ella Flagg Young)の役割と貢献 - 」日本カリキュラム学会、2009年7月10日、神田外語大学

太町智・中野真志「生活科を担当する教師の指導力を高める研修プログラムの開発」、日本生活科・総合的学習教育学会、2009年6月28日、鹿児島大学附属小学校

中野真志「デューイ実験学校のカリキュラムにおけるオキュペーション - 『実験学校ワ

ークレポート』の社会的オキュペーションの考察をふまえて - 」日本教育方法学会、第44回大会、2008年10月12日、愛知教育大学
NAKANO SHINJI et al., "The transformative experience which is created by interactions between those teaching and those learning in classroom environments," 2nd Congress ISCAR(The International Society for Cultural and Activity Research), September 12, 2008, University of California, San Diego

[図書](計1件)

中野真志他、啓林館『小学校 せいかつ - 「授業力をみがく」指導書ガイドブック - 』、2008、94頁

[産業財産権]

出願状況(計0件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

出願年月日:

国内外の別:

取得状況(計0件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

取得年月日:

国内外の別:

[その他]

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

中野 真志 (NAKANO SHINJI)

愛知教育大学・教育学部・教授

研究者番号: 90314062

(2) 研究分担者

()

研究者番号:

(3) 連携研究者

野田 敦敬 (NODA ATSUNORI)

愛知教育大学・教育学部・教授

研究者番号: 30293731

久野 弘之 (KUNO HIROYUKI)

愛知教育大学・教育学部・准教授

研究者番号: 30325302